

久保田暁一先生の生き方

上田 藤市郎

先生は何といつても「だるま通信」の人である。「だるま通信」は先生の生命の気管支（機関紙）であった。ここを通して先生は、自分の哲学、人生の智慧、キリスト者としての他者への愛、文學への志を発信し、長年に涉つて数限りない読者から、惜しみない敬意と激励、感謝の気持ちを受け取っておられたのである。先生の生涯は、教育と文學に彩られているが、「この二つのものの基盤は、人とのつながり、絆にこそある。」というのが、先生の信念であり、「だるま通信」そのものであった。だから、先生はだれに対しても謙虚であり、にこやかに、静かではあるが、熱心に人の話を傾聴された。「貌言視聴思」の実践家であった。

久保田暁一先生を追悼して

先生のお宅を訪れたとき、万巻の書物に囲まれた土蔵の雰囲気をもつ書齋で、「ここで執筆しているんだ。」と語られた。あの自信に満ちた至福の笑顔は、「自分の人生は、どこまでいっても文學にあるのだ。」という確信に満ちていた。先

生の処女作「青春の探求」は、先生の人生「文學の探求」につながっている。書棚から、先生は敬愛する作家の書物を引き出して見せてくださり、普段、訥弁であった先生の口からは、流れるように、「椎名麟三は、三浦綾子は、遠藤周作は、アルベール・カミュは、こうこうだ。」と話は尽きることがなかった。これら作家の作品の底を流れるものは、先生の著作の原点である「存在理由」、「生きることの意味」である。先生は、常に上から目線ではなく、「人に自慢できるものは何も持っていないけれども、しかし、人として最低限、これだけの力はだれでも持っているし、これを生かすことが人として大切なのだ。」という考えであったように思われる。だからこそ、藤樹先生の生き方を「だるま通信」の紙上でいつも讃えておられた。その根底は、「人はだれでも悩みや苦しみがあるし、不幸に陥ることもある。それは避けられないことだ。しかし、それを真正面から真摯に見つめて勇氣をもつて生きていかなければならない。」というものであった。そして、先生の作品は、郷土高島に発するものばかりであった。

先生自身、晩年持病に苦しんでおられたが、常に私たちに勇氣をくださったのであった。

久保田暁一先生を偲んで

川越 清司

久保田先生とはじめてお会いしたのは今より50年前のことです。その場所は県立高島高等学校でした。一度も授業を受けたことはなかったけれど、大変厳しい先生でした。私が事故を起こした時には即退学の処分を提案されたと後で聞きました。ところが何かの縁があり首がつながっていました。私の高校時代はあまり感心した生活を過ごしていませんでした。

ところが時代を経るに従って、当時より30年を経た後、神のご加護のもと再会を許されました。今度は、久保田先生は、何を勘違いされたかわかりませんが「川越くん、川越くん」とお声をかけて頂き、西びわこ藤樹木鶏クラブの創立時には身に余る仕事を戴き、なお一層のお力を添えていただきました。木鶏クラブの例会時には、致知をはじめ一語千鈞（森信三著）を説明くださり、藤樹先生の事を学習する先鞭をつけていただきました。それまでは唯唯人に付いて行くだけでしたが、自分自身学ぶことを教えていただきました。たまに宴席で一緒にすると私は元気がでます。久保田先生は、そんな私にも喜んで調子を合わせてくださいました。又、欠かさずだるま通信を

送って頂き葉書で礼状を書きましたところ、次回のだるま通信にて紹介をしていただきました。

そして読書会が発足した時、不自由な体を物ともせずの心意気には、回りの会員達は傍観する事は出来ませんでした。学ぶことの貪欲さには心打たれます。

又、3年前に高島藤樹会の会長に就任させていただいた時には我が事のように喜んで頂き、その御蔭で現在も務めさせていただいております。何の縁で久保田先生が私をかわいがっていただいたのかは未だ不明です。

久保田先生が6月にお亡くなりになられた時には、往年のお付き合いの広さを感じさせられる多くの方のお見送りがありました。私も久保田先生のような生き様を過ごしたいものです。そのためには一層の学びが必要です。老いて学べば死して朽ちず、命尽きるまでの学びの大切さを教えていただいた事に感謝申し上げます。久保田先生、本当にありがとうございます。安らかにお休み下さい。

